

## 画像生成 AI 以後の感受性の変化を捉える ——白黒レプリカ作品《物のイメージ》を通して

中村 駿（株式会社 白）

### 発表要旨：

本発表は、画像生成 AI 以後の視覚環境において、人間が対象を「そこにあるもの」として素朴に受け取るのではなく、「写真的なもの」「CG 的なもの」のような典型的な特徴から推論するような感受性を形成し、生成 AI になぞらえて自己を認識しつつあるという仮説を、筆者による芸術実践《物のイメージ》（2025）を通して検討するものである。

近年の画像生成 AI は、被写体の物理的存在なしに、写真と見分けのつかない写実的画像を生成可能にした。この状況は、写真を対象の痕跡として理解してきた従来の視覚モデルを変化させている。パースの記号論において、写真は被写体との物理的・因果的接続によって成立する「指標」として位置づけられる（小倉、2013、65-66）。バルトは写真のノエマ（本質）を「それは=かつて=あった」と表現し（バルト、1985、94）、ウォルトンは、写真を通して過去の対象を「文字通り見ている」とする透明性テーゼを提示した（ウォルトン、1984、263; 清塚、2003、21）。しかし生成 AI 画像は、このような対象との物理的・因果的接続を持たないにもかかわらず、「写真らしく」見える。現在、私たちは画像を「指標」としてではなく、「写真らしさ」や「AI 画像らしさ」といった特徴の集合として受容しつつある。そして、この変化は画像の見方に留まらず、実物体や現実空間に対する感受性そのものにも影響を与えているのではないか。

こうした問題意識に基づき、筆者は白黒の立体レプリカによるインスタレーション《物のイメージ》を制作した。本作は、薔薇、ラーメン、バナナといった日常の対象を、実寸大かつ無彩色で再現した作品である。鑑賞者はそれらを見た際、まず「写真的なもの」「CG 的なもの」として知覚する。しかし実際には、それらは空間を占有する物理的な立体物として存在している。

本作は、「これは媒介されたものであるはずだ」という鑑賞者の前提を利用し、それを物理的現前によって裏切る構造を持つ。

この構造を説明する例として、本発表では飛び出す絵本を参照する。飛び出す絵本に驚きが生じるのは、「本は平面的なメディアである」という前提が身体化されているためである。平面であるはずのものが、ページをめくることで立体として現前することで、その前提が裏切られる。一方、本作の白黒レプリカは、当初から空間内に立体として存在しているにもかかわらず、「写真的なもの」「CG 的なもの」として知覚される。ここでは対象が変化しているのではなく、鑑賞者側の知覚が揺さぶられているのである。この体験を通して鑑賞者は、自身の知覚が、対象を素朴に受け取るのではなく、特徴の集合から「もっともらしさ」を推論していることを自覚する。そこでは、人間の知覚そのものが、画像生成 AI を説明するための確率的なモデルになぞらえて、逆説的に理解され始めているのである。

### 参考文献一覧

小倉健太郎「インデックスとしての機能を喪失する写真 1.0 : C.S. パースに従って」『美学芸術学論集』11号、2013年

清塚邦彦「写真を通して物を見ること : K・L・ウォルトンの透明性テーゼをめぐる」『山形大学紀要（人文科学）』15巻2号、2003年

ケンダル・ウォルトン、「Transparent Pictures: On the Nature of Photographic Realism、"Critical Inquiry 11、no.2、1984年

ロラン・バルト『明るい部屋 写真についての覚書』花輪光訳、みすず書房、1985年